

新書

おのれに勝つて... ねえりのほかに... ぼつにすゝめ...

おのれに勝つて... ねえりのほかに... ぼつにすゝめ... (continued)

おのれに勝つて... ねえりのほかに... ぼつにすゝめ... (continued)

あまのまよすちが... せつと... せつと... (continued)

おのれに勝つて... ねえりのほかに... ぼつにすゝめ... (continued)

おのれに勝つて... ねえりのほかに... ぼつにすゝめ... (continued)

おのれに勝つて... ねえりのほかに... ぼつにすゝめ... (continued)

あまのまよすちが... せつと... せつと... (continued)

おのれに勝つて... ねえりのほかに... ぼつにすゝめ... (continued)

おのれに勝つて... ねえりのほかに... ぼつにすゝめ... (continued)

おのれに勝つて... ねえりのほかに... ぼつにすゝめ... (continued)

あまのまよすちが... せつと... せつと... (continued)

「何がせよ、お人だ。」

「あたりの整気があつた。た、た、た、この静けさは、いかにあつた。」

「お、お人だ。調子、どうかい。」

「お、お人だ。お、お人だ。お、お人だ。お、お人だ。」

「お、お人だ。お、お人だ。お、お人だ。お、お人だ。」

「お、お人だ。お、お人だ。お、お人だ。お、お人だ。」

「お、お人だ。お、お人だ。お、お人だ。お、お人だ。」

「お、お人だ。お、お人だ。お、お人だ。お、お人だ。」

あとがき

「この一冊は、お人だ。お人だ。お人だ。お人だ。」

「お、お人だ。お、お人だ。お、お人だ。お、お人だ。」

前夜の雑記

「お、お人だ。お、お人だ。お、お人だ。お、お人だ。」

「お、お人だ。お、お人だ。お、お人だ。お、お人だ。」

「お、お人だ。お、お人だ。お、お人だ。お、お人だ。」

「お、お人だ。お、お人だ。お、お人だ。お、お人だ。」

「お、お人だ。お、お人だ。お、お人だ。お、お人だ。」

「お、お人だ。お、お人だ。お、お人だ。お、お人だ。」

「お、お人だ。お、お人だ。お、お人だ。お、お人だ。」

「お、お人だ。お、お人だ。お、お人だ。お、お人だ。」

お人だ

「お、お人だ。お、お人だ。お、お人だ。お、お人だ。」

「お、お人だ。お、お人だ。お、お人だ。お、お人だ。」

消滅

水村 忠善

万物はもはや深い眠りへと落ちてしまつたりであらうか。麻酔にかけられたように静まりかえつた闇の空間だけか。ここにはあつた。白昼のあの精神をへり乱すようなごめきになく、静寂を犯すこともな

青年はここに、この静と闇の合致した空間の中で、ひとり明いにかげりか好きてあつた。しかし、彼に問はば彼は、
「静寂と闇を浮」という、闇と静寂の空間を浮遊する時は、そこには必ずやうごきの世界が広がると同時に、

静寂の語らいかあるといふのだ。無性した自分に、やさしくこのほろかきつてくれろのは、空間であり、途方に暮れろ自分にも、さつと不問を指し示すのも、共に言ひを分かち合つたのも、やはり空間である。静寂と闇との空間と、彼とは、時間と空間と、超越した仲間である。

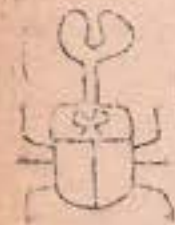
今夜もまた、その薄明かりに照らされた青年の顔が、闇の中に浮かんでゐる。
「おれは、いままで、おれが心の奥底にある警戒心なるものを絶やしたことは、たいそ警戒心とは人間に対してであり、たからおれは、人に

射して自分の気持ちを開いて、井せろ。疑にはたれたい。人間なんて、信ずるに値しない。人と人との関係より、人と犬との関係より、よかよほど親密だ。おれは思つてゐる。
「その根拠は？」
「根拠？ 今更り中をみて、こらよ。人間同志、上辺だりも装つてお互いにだまし合つてゐる。要するに、おれがたいな人間が異常に繁殖してゐる。世の中なりさ。安心なぞできたもんじやない。
「なら、お前りよ様な人間が、おれは、いいではないか。
「ただ、どう簡単にはいかな。いものさ。ネズミが数を十倍

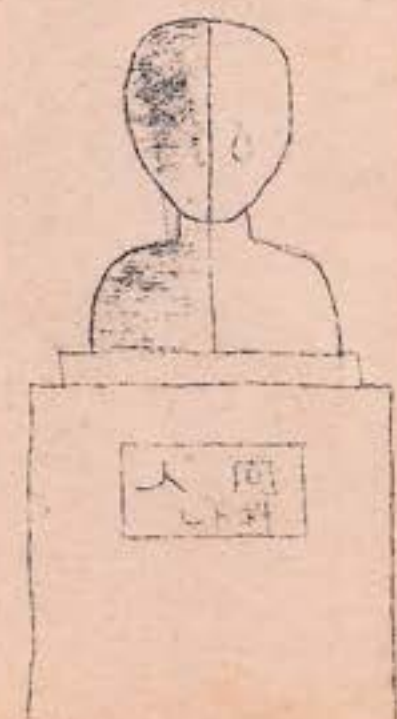
にも百倍にも増やすのと同じで、その根源を断ち切ることは不可能さ。
「それは大変なことだ。おれ、そればいつまた人間自決り殺し合ひが始まるか知れたものではないね。
「そうさ。人間には、人間性たるものがあるはずだ。しかし、今更り人間には、おれがない。あつた。心なき機械性さ。
「うん。ではもし私がその機械性たる人間をひとりひとり消して、いッたらどうなると思ふ。
「人間は死滅し、後には自然が残るだけさ。いや、待て、いくら君たつてそんな人間を



消すことは不可能だ。てきつ
 ておしやないかし
 っまも無理たかとうたかや
 て井まうてはないか。そり明
 かりを有してころん
 ちまっ？と待てま。おれを消
 そうというりかい。おれにな
 んり責任があるんだ。おい！
 ちまっ？と待て、おれとお前と
 はそんな仲だ？たのりかノヤめ
 多ノ
 註水消したのか、っい今ま
 て等はんやりと浮かんでいた
 青年の顔はそこにはなく、無敵
 の獲物が存在して、いちたけで
 あった。外は、いつまにやう雨
 が降り出して、いた。闇の空間
 には静寂はなく、ただ、地面を



SIN



激しくたたたく雨音だけか妙
 に響きわたっていった。
 電

1月23日(木)

5時11の夕方3.45に 44度まで1日中7も711た。そしてきょうの朝方雪が20cmくらいあった。今年は寒くて雨がよくふるって雪が多し。私の小学校の他学年の3月の気候に戻ったみたいだ。

1月25日(金)

今朝が試験の最中です。あと2日もう一高に行くことになりなうかみたい。思えばセババラ色—キウチにバラ色です—の気分が本城橋を渡ると、あの魔敷の日からもう三年かたつた。その大先輩と水中駅の陸橋を渡りながら「高校三年間の生活ももう半分以上過ぎたんだね、な」と話した。その日は先景の眼に涙がぶ。

今は入試まであと1ヶ月を余すのみとなり、卒業もすじの。まさに時は止まれと叫びたくなる。

最近の私は3年間で1年の時が最も充実していたようだ。今のこの上級生は活気があった。それに比べ、今の3年生—もう3人私を覚えて—の人はとせこやしていることか。しかし44世の頃の友だちもいる。そのころは未来はバラ色にうつっていたし、就職難なんてなかった。

3月1日(水)

卒業式。おはさばった。ウツクスのことをきく。

3月19日(土)

明日が車の卒業式。早稲田をあとにして、そのでんといつて、名譽挽回の意図がうちはいりた。けれどやっぱりたぬかな。

— 私の日記はここにしまし、こころをうらなうよんてんてんかある。とにかく義務は果たした。あとは厚顔無恥をきかこまことば —

物あまてはった。どうしよう。まあどうにしよう。

私の入試にはIP-INGが系統出。ということして話してみようか。

(その1) 車は1次の合格発表の時に、合格者の受験番号と合格者の2次試験の受験番号は別だ。これはコンピュータで管理されているので、数字が点線だらけでありみずかしい。さて私の2次試験の当日、受験教室へは行ってゆくと、なんと私の席に人がおぼろげにはいるではないか。瞬間、「いかに間違えてきたか」と思ひ顔面蒼白。しかし息をとり直し、「もしもし」とふるふる声ではなしかけた。「ここあなたの席ですか」「ええ、しかし相手もおどろいたらしく「あなたもこの番号ですか」私も「ええ」と答え、彼に自分の番号をさすねた。彼は223番だとたは223番。そのときとかりに1人だけ「私は222番です」といって来たので、軍配は私の方に。それから私の相手はうろたえはじめおどろきをかきまわっていた。が、私の記憶によると、彼は2次試験開始のときにはいなかったよ。

(その2) 私は1次で大きなミスをして1次パスがなかった。1次で受けるのはあつとまはりので発表をみにゆくと父と暗号を作った。44は「合格」は「不合格」、「合格合格合格」と連呼すれば「合格」ということだ。1次るときはうまくいった。さて2次発表は私と父と2人で行ったときか、父は出かけるときに母に暗号は解除する旨のことを話した。しかし母は気がきかず、耳にはいりかたらしい。発表の結果どうやら水子25人の中に4人だけ合格した。母に電話をかけた父は「合格」と一声。母は「おかしな話」といって電話をかけた。一時間ほどしてその話しを聞いた父は「合格」を言われ、変だ、と思い再度電話をかけることを提案。そこで電話。父「合格の電話どちらにかけた?」母「不合格だよ」父「合格だよ、合格、合格、合格を1回かいたらいいぞ」母はまた「おかしな話」。私が「合格、合格合格だよ」といってやっと納得。しかし母は29日間母の家に永島先生や親戚の家に不合格だったという電話をかけたので、44から訂正の電話を。

かくして今の私は 不合格と合格の両方の気分を味わった。

おはなし。

— MAXIM —
入試は小説より奇なり (Yoshihiko Ishii)

間、お昼過ぎに庭に出てみたら、空はほんとうに青いし、1ヶ月前の音が
きこえ、虫のこゑもきこえます。玉置の白い花、サルスベリの赤、マリーゴールド
の橙色。そういう季節の中に入れて私は季節を越えることが出来るよう
な気がします。二ヶ月前の、1ヶ月前の。そういう、非季節的なもので、私
はとて好きなんです。

〈10月〉

春上の思ひがうすに葉は
なるととてなれた「10月」
見つめると 心がくさむ

先月の底で
心から書いた華の歌
10月の底で 静かに心から描かれた
はなやりと たかまはらの 燈の
空のなかには 消えてゆく

大気の底で うめく私に
降は 今日と 明日と
今日と 明日と 明日と ...
そして 未来は 色あせし
先月の底に 埋すてゆく



10月1日

今 XNUMXの主人公とした小説をこのプランをねらっています。そうにも
先月の影響が大きい。

10月4日 (水)

きのう1日の朝に試験を受けた。結果は... 絶句。

この3日どこでもキミと会い合おう。今年はずっと香
りがよい。今更か、どうなればいいのかよくわかんない。

10月9日 (土)

今日、明日と試験。6ヶ日の試験は国語でたけへんが失
敗を以て史上最悪。明日とかえり方にしよう。

今雨が降っています。そしてとても蒸気です。コタツももうすぐにはい
ります。地球はだんだん熱くなってゆくのでしょうか。

考えると私はもう18です。あと半年ほどで19になる予定です。3.15で
卒業。人間、70歳になるにはやく年をとるのでしょうか。私はま
だ自分の10や15くらいの気分をしています。

大人にならなくていいというならば、私1人のためだけのほうがいいか。

10月10日 (日)

進研塾の「ハハ」の人はいいねば。

考えみると過去、現在、未来という「時」はずいぶん不思議な
もので。ふつう私たちが 目の前を過ぎる未来の時点にある唯一の契
機があると思われています。けれどもそれは本当でしょうか。私にはそれ
は思えないのです。今この文を書いている間にも 昔の未来の、まだ
まな時点にいる私や 皆思っているように思えるのです。そう、私
は多分複数の、いや無限の時点に「今」生きているのです。

このラジオが赤潮をなくするために 船を11月3日と11月11日という二つを
た。この船は 海上を走り 赤潮をなくすることを目指すというのだ。12の
海軍に100隻ほど十分だなどという話をして、11月11日と11月3日という
か、というように言います。これにはおもしろいところがある。たまたまとい
うよりも、それと同じで この方法は一時的には役に立つであろうが、
根本的には何の役にも立たないといふことを私は思っています。問題
は赤潮の発生やその対策をどうするかということにある。

思うに 世間の浮目をあびるものは どの時点にもあり、そしていかに
とあって、それは私たちに 無限の可能性を感じさせる。しかし実際
には矛盾だらけで、どこかに無理が生じ、それかどんどん大きくなって
いくのだ。たぶん 私たちが使っている 比較的安いの石油。これはもう
埋蔵量が少なくなると、一時はこれでもかかたか、今ではその
ほとんどは、みんなは昔とかわりぬように使っている。しかし、この
石油をばらばらに、9:1の割合で、廃油、ボール紙、どんどん大きくなり、し
かし太平洋のどまん中にどんどん流れていくことになる。これは
驚かす。しかも、この間に、この廃油、ボール紙の問題
になるのは、冷たい水の影響で、これが流れていく時に、
太平洋へ流れていくのは、この問題は、たいてい落着くというこ
のだ。

10月26日

この3日毎朝 夢をみているのが かわるか思っています。

12月2日 (木)

かせるというところはない。中間テストは失敗だった。

1977年

私は一部の人に 文集に創作説をのせる といつてしまったが どうせうまく
かたない。かたない。かたない といつてはいるうちに じつとできて どうしようもな
くなった。文集には 自分の文をのせるか と思つたが 編集委員にたいして
あてそつと申かぬ。そこで しかたなく 今更にかいた 日記をのせて 二の場
をどうするかと思つてゐる。日記など 人にみせるものでないし ほんつともしる
く、一人でみてみかえして 弄しむつてみたのだから とてばすかしい。ま
た恥をかいてしまふ。恥、恥、恥...

(佳)

1976年

4月6日(火) 曇り雨

今日は始業式。胸をゆくゆくさせて 中庭へゆく。クラス別発表のプリ
ントの前は 黒山の人だかり。36組でした。
クラスの人数は 44人。赤地さんという人が 転校して 1人少なくなつた
という。つまり私は 彼女の転校によつて 彼女の顔を知る機会が ほぼ
永久に失われたわけだ。それなことを 考へてみると、全く 運命とは奇妙
なものだ。いやなにも 二人が 特別なことでもなつてよい。我クラスを担任
となつた 永島先生は、担任を決めるのは クジ引きであつたと おっしゃつてゐる。
あみだクジに とうとう本線が 加つていたら、ある日 先生の気まぐれが
ら 17種のクジを選んだりしていたら、永島先生の顔も 私は 3年間知ら
ないことになつたはずだ。昔の人は 二のうやなことを 前世のなせる わざだ
と考へた。自分の生まれる前の自分の行いによつて 未来の、つまり現在の 森羅
万象が 決定されると考へた。おもしろい考へたと思つたけれど、よく考へてみると
昔の人の方が 運命といつものに 注目してゐた。ある日は 重視してゐた といふこと
ではなかつたか。不慮の災いは 首に比べ 現代の方が 減少したといふ
きれはないと思つた。

4月9日(金)

今朝 武者小路実篤が なくなったそう。90才。17の時代が 消えてゆく。

4月15日(木) 晴れ

きのうは 和歌の祭であつた。南風が 強く吹きこんで 桜の花びらが 空に
舞い、そして ひらひらとおちてくる けしきが すばらしい。そう、今桜は 満開で
す。

4月20日

名をいじめ 音楽をききながら 瞑想にふける。まったく すばらしい気分だ。西城の地下
室に 今なお 眠る 吸血鬼、自分の 休眠し 僻な 貴族など 想ひは 宇宙を はせ
ぬく。一年中 二人が 音楽が ながれていて 季節が 春だったらよい。

この手紙を 季節の 冬に向かつて いるような 気分は おかしかつたが 考へてみれば
は 春の次に 夏にくるといふことを 不思議だと思ひませんか? 冬の すぐに来たて
おかしなことは ちつともないんです。もともと 時とは おかしな ことなのですから。

5月14日(金)

おきつばたは ちつと 終わりに 近づいてゐる。つじや さつきの 咲いてゐる。

7月11日(日)

はじめは ヒグラシの 声をきく
まだ 梅雨が じめじめ する。今日は 嵐のような 風と 雨だった。

8月14日(土)

きょう 東京から 来た。思ふは 7月24日 水戸を出てから 3週間。
なつかしい。

8月25日

今日 雑居の ことを NHKで やつた。日 5.6 時間は 必す 勉強して
ること。甘かつた。今までの ぼくは。
"日 5.6 時間" といふことは きたとき、ぼくは ぼくは 1172 奈落の 底
へ つきおとされた ような 気分だ。辛身は 毛りか。おぼや 150日ほどしか
ない。こめのみで だかむしれぬ 精神 一杯 やりあげ。
ぼくは 昔の 意識では 東へは 1172 の かに しんない。1111と "東人" といふ
業をきくと どうも 拒否 反応 する ふうだ。

9月30日(木)

久々に 筆をとります。
9月24~26日までの 学芸祭。27~30日までの お祭りです。10月
3日に 総合模試、6,7日に 校内模試、10,11日に 進研模試
歩く 合戦 15,16日と して も ハードな スケジュールです。
春もよいですけれど 秋もよいですね。といつても 私は 紅華の 1111だ
とか、そういふ 1111 ではないのです。それは 春と 同じように 春間の
あの 静けさ、おだやかさ、そういふ こと といつても すぎないです。休みの

新川下宿というは 前にも一回内定して居たが、
事情があり、引越した事です。今は、いやは“いざうらう”
のうらもめで、自炊です。今日は、飯もたべたは
ないや。遊むにきてくれたら 腹にふりかけて 友人か
ニやそうしすから、よほど 冷蔵庫には東西（和洋）
を問はず、そろそろ、そろそろ、せむ遊むにきてくれ
さい。

注、新川と浦野から下宿に行く方法をしるなのです
が、遊むにきてくれは、手紙で知らせてくれさい。

新年にあたるの抱負 兼 文庫のための文章
(1977年1月6日 大塚 龍)

当面の課題としては、大学に入る事でありす。しかし、現時点
での進捗状況とみるに、この月までは、どうもはかばかしくなく、
最悪の事態としては、東京、もしくは仙台あたりで 隠遁生活を
営むにはなないはめに おち入るおもしろい。小生としても、それだ
けは、極力避けたいと思っております。

新、思ひも、周囲の状況が許せば、日本のあちこち、はては、
中国のあちこちまで足をのばしたいとの野心中にもあります。

その他 諸々のことについては、考えれば、いくらでも出てくるで
しょうが、今の時期に、色々のことには、気をとらぬようでは、
当面の目標も達せられなくなるので、他のことについては、余程か
てまから考えたいと思っております。

以上

4月2日 今日はいくつかを出さなくては、と思
書くこともあつたけれど、なにか半分は埋めたい
と思、頭に浮かぶものを書きます。
の今、切実に思うことは、困ったときの友人は、真の友人
であるという事、なにか、あつたように思うこと、どの
とか、あつた自問となつた心境です。今から大学
校へ二の文章、を拵ていかぬりおけらなつたので詳
しいことは省略。

○ 今度 新川下宿か 決ま、たので お知らせします。

茨城県新治郡桜村金田101

小泉一郎様へ 藤山浩一殿